腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第七十四弾

神社本庁再生への道―その三十七

日本を蝕む利権構造を一掃せよ

―全国の神道人は自らの使命と責任において、神社界の清浄化に取り組むべし

藤原 登（フリーライター）

元日の日本を大地震が襲った。震源地の奥能登では震度七を記録し、多くの家屋が倒壊した。さらには津波も押し寄せ、火事も起こり、多くの人命が失われた。今も尚、帰るべき家を失った数万の人々が避難生活を余儀なくされている。忘れた頃にやって来るのが天災だが、何も元日でなくても誰もが思ったことだろう。心からお悔やみとお見舞いを申し上げるとともに、一日も早い復興を願うばかりである。

為政者のつとめと天皇の祈り

大規模な自然災害が起こると、自ずと防災対策が話題になる。自然界はあまりにも巨大であり、物理的な防災対策には限度があると思うが、天災がおきても被害を最小限に抑える対策を講じておくことが、昔から為政者の大切なつとめであった。

古代においても、旱魃や冷害による飢饉に備えて、食料の備蓄に関する法令が定められていた。また、洪水被害を抑えるための治山治水事業は、その時代の最新の技術を駆使しながら行われてきた。それらは自然に手を加え改変するだけでなく、危険な工事を伴うことから、節目節目に神々を祀って、御神威を畏れ仰ぎながらの事業であった。言い換えれば、その営みこそ、日本が神国たる所以であるのだ。

同時に、地震や火山の噴火が何時どこで起こるのか、科学文明の発達した今日でもわからない。故に、現代においても、自然災害への備えや支援は、物的側面だけではなくて、精神的な側面が大切にされなければならないのだ。

古典の中には、大地震や疫病に際して、民のために祈る天皇の姿が記されている。近代文明のもとにある今日においても、天皇のお姿は変わらない。平成二十三年の東日本大震災に際して、五日後の三月十六日に発せられた両陛下のビデオメッセージは、まさしく天皇の祈りの御言葉そのものであった。本年一月二日に予定されていた皇居一般参賀は、被災地の状況に心を痛めておられる両陛下のお気持ちを踏まえて、急遽、中止されることとなったが、国民生活の安寧を祈られてきた皇室の伝統は揺るがない。

神道界を堕落させ、日本人を蝕んできた利権構造

筆者は、現代の日本人にも、天皇の大御心を仰ぎ奉る精神、尊皇の精神が継承されていると信じるものである。しかし、精神構造の骨組みには異変が起きているように思えてならない。

三島由紀夫は、檄文において、「われわれは戦後の日本が、経済的繁栄にうつつを抜かし、国の大本を忘れ、国民精神を失ひ、本を正さずして末に走り、その場しのぎと偽善に陥り、自ら魂の空白状態へ落ち込んでゆくのを見た。」と訴えた。それから五十年以上が経過して、事態はより悪化している。

三島の生きた戦後経済の高度成長期は、経済の発展が国民共通の願いであったことは間違いない。しかし今は、国民経済は分断が進み、上級国民という言葉が揶揄の意味も込めながら使われている。現実に貧富の差が拡大してきた原因は、戦後体制のもとでのグローバリズムの浸透により、日本社会の隅々にまで、利権構造が張り巡らされてきたことにあるのではないか。

その筆頭が、裏金問題が発覚し、国民から愛想を尽かされつつある自由民主党であり、そして、政治家に媚を売り、互いの利権構造の強化に血道をあげてきた神社本庁の田中―打田体制である。

それでも、権力闘争がつきものである政治家と、清浄であるべき神道人とを同一に論じることには、いささか抵抗がある。冷静に考えるならば、内部からのより厳しい指弾が求められるのは、神道人の方である。無責任体制に陥っている現状を、草創期に神社本庁の基礎を築かれた先達たちが見たら、どんな感想を述べられるだろうか。通り一遍の言葉ではなく、最大限の表現で一刀両断にすることは間違いない。

神道人の使命を思い起こせ

今、無責任の度合いでは、田中、打田両氏を一気に飛び越えた感があるのが、東京都神社庁の庁長で、神社本庁の常務理事もつとめる小野貴嗣氏である。前号でも触れたように、事の発端は、腹心の部下であった神社庁の職員による三千万円を超える横領事件である。しかし、発覚から一年も経つのに、横領したお金の使途も含めて、事件の詳細は明らかにされていない。恂に不可思議な事件であるが、実は、東京都神社庁の横領事件に前後して、滋賀県神社庁においても、神職による四千五百万円もの横領事件が起きていた。事件の概要は宗教業界紙の中外日報に掲載されたが、横領したのは、大津市鎮座の日吉大社の禰宜で、同社が所属する神社庁大津支部の積立金を着服したのだという。

こちらも立派な犯罪であるが、違ったのは、監督責任の取り方であった。

日吉大社の馬渕直樹宮司は、滋賀県神社庁の庁長職にあったので、自身は横領した禰宜の監督責任が問われる立場であると同時に、神社庁のトップとして、支部の会計管理についても適切な指導をすべき立場にあった。馬渕庁長は事件発覚後、事態の収拾に努め、その目処がついた段階で宮司の職から身を引いたということだ。庁長の職も任期前に辞すると思われ、当然とは言え、最低限の責任は果たしたといえよう。

これに対し、東京都の小野庁長は、宮司の職は当然、庁長職も辞めるつもりはないようだ。「利権が絡んでいるので辞められません」と公言しているようなもので、神社本庁の田中氏と、神道政治連盟の打田氏という前例が頼りであることは間違いないが、世も末の感がある。自らの使命を自覚する神職は、今こそ声を大にして発言すべきだ。

王様は裸である、指導力はおろか、統治能力のカケラもないと、見るがまま、感じるがままの言葉を正直に浴びせるだけで良い。どんなに強固な利権構造であっても、利権である以上、裏金問題のように蟻の一穴から崩れていくことは間違いないし、すでに構造全体もボロボロであることが判明しているのだ。神道人が自らの使命を思い起こすときである。

藤原　登（ふじわら　のぼる）
昭和二八年、東京に生まれる。広告代理店勤務の傍ら、歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。